

# 幼稚園教育と指導法

堀 内 外 代 子

## 目 次

- I. はじめに
- II. 遊びの発見
  - 1. 自由な遊びの中で
  - 2. 環境構成の工夫
  - 3. 遊べない子への配慮
  - 4. 言葉づかい
- III. 望ましい遊ばせ方
  - 1. 興味のある遊び
  - 2. 思考力を育てる遊び
  - 3. 総合的な指導について
  - 4. 指導の流れの工夫
- IV. 視聴覚教材の利用
  - 1. 幼稚園教育と視聴覚教材
  - 2. OHP利用について
  - 3. TV利用について
  - 4. 映写機の活用について
- V. おわりに

## I. は じ め に

「そんなに先生の傍へ寄ってきたらお話ができないでしょ、ちゃんと自分の椅子に坐って行儀よくしていなさい、そうしないとお話しませんよ」教師は大声を出して3才の幼児達を静かに坐らせようと必死である。しかし一向に幼児達は教師の言葉を耳にせず、絵話のオオカミや小ヤギのフィギュアを興味深くさわりながら、それぞれ一人一人が何か教師に話しかけわいわいがやがやさわいでいる。ところが教師の機転で、「あらあら小ヤギさんのおうちお留守で空いているわよ、誰のおうちかな?」「やあー」と、小ヤギのつもりでいる幼児達は、歓声をあげて自分の椅子に戻った。一瞬シーンと静まる。それから教師は思いきり話を進めることができた。このときの教師の機転は幼児の心理を巧みについていた。

保育原理が一応理解できていても、そのことが指導の実際と、どのように関連し、生がされるかということは、簡単なようで難しく経験を重ねるといこともさることながら、矢張りそこには、指導技術というものが重要視されてくるのである。指導計画が吟味され準備が整えてあっても、40分の計画が20分位に終ったり、逆に10分程度の予定が30分にも延長したり、順調に進む筈のプログラムが行き詰ったり、はちの巣をつついたような状態になってどうしてよいかわからなくなってしまうことがある。又保育の経験の永い教師で、一見上手にプログラムが進められているようにみえていても、幼児にとっては、それが少しも興味のない遊びであっ

たり、無理やりにやらされている作業であったりして、貴重な時間を空費しているような保育をみることがよくある。若しそんな毎日が繰り返されているならば、それは形だけの保育であり、けがをしない程度のおもりにしか過ぎないと言えよう。そうであってはいけないので、大切な幼児期であればこそ、はっきりした目的をもった教育的意図のもとに、プログラムが展開されるべきである。

## II. 遊 び の 発 見

2才8ヵ月になった女兒が裸足で遊園地のジャングルジム（画の内のり41cm）に登り、一番高い所迄みるみるうちに登ってしまった。そして「ヤッホー」と叫んで得意気な様子である。6段あるジャングルジムだが従来は4段どまりで遊んでいたのに一番上迄登ったのは初めての経験である。おどろいてジッと見ていたら、どうして降りようかと考えている。左手と左足をそっと10cm許左の方向に鉄柱にすらせながらずらした。それから右手と右足をそっと左の方へよせている。又同じことをして縦の鉄柱のあるところまで来た。今度は左足をゆっくりと鉄柱に添わせて下の段迄降りし右足も降りした。やっといつもの四段まで降りたと思ったら後はさっさと降りてしまった。この女兒は2.7mの高い所から降りることが初めての体験でもあり恐怖に近いものを感じていただろうに、安全に降りるにはどうしたらよいかを自分で思考し、自分で発見し学んだのである。

幼児はこうにして自分自身で遊びを発見していく力を持っている。さて幼児の一日の生活は、その殆んどが遊びであり、そして遊ぶことによって、いろいろなことがらを学習し、いろいろな面を発達させていく。それは大人の言う遊びとはおのずから異なるものであり、幼児の遊びは即学習であり、なくてはならない大切なものである。したがって、幼稚園に於てもこのことを念頭におきながら、遊びは教師から与えられるものではなく、幼児自らが発見していくものであり、又発見しやすい状態にもっていくことである。小学校や中学校等に於て主体的学習とか発見学習とかいうことが以前からよく叫ばれ、とり入れられているが、幼稚園教育にもそのことが同じように言えるのではないかと考える。

### 1. 自由な遊びの中で

指導者 北陸学院短期大学附属ナースリー・スクール江尻悠喜子教諭・高島幸子教諭

対象 3才児 期日6月10日

朝登園した幼児は、自分の部屋（教師が前日設定した環境）に入る。5人の幼児が水槽に入れられたカタツムリを、じっと覗き込んでみている。A男が「あっ、うんこしているよ」とおどろきの声を発している。他の4人はそれを確めている。B男は「さわるとびっくりしているよ、葉っぱにくっついてとれないよ」と言っている。A子は机の上に置いてあった絵本（カタツムリのところが開かれていた）を先生にみせて何か説明している。しばらくして教師はキュウリの切ったのを持ってきた。それをもらった幼児達はカタツムリに食べさせていた。突然C男が「カタツムリお肉食べるかな？」と言う。「さあどうでしょうね」と、教師の答は疑問を残した

ままであった。「よし、僕明日おうちからお肉一ぱい持ってくる…」と一生懸命になって話している。そこへD男が来て、葉っぱにカタツムリをぶらさげたまゝ持ち出して部屋じゅう歩きまわっている。それをみつけた教師は、「カタツムリさんがかわいそうよ、この中へ入れてみましょうね」と言うと、D男は、しぶしぶもとの水槽に戻した。

反対側の片隅に中型の箱積み木が置いてあった。E男とF男が2人で直方体の積み木を2個柱のように立て、上に平たい板を渡して門の様なものを作っている。「これは何？」と教師が質問するとE男が「玄関」と答えた。G男は立方体の積み木を一生懸命囲りに積んでいる。E男は「お店屋さんごっこしよう」というと、2、3人の子が集ってきた。みんなは、ブザーを押すまねをして門をくぐって店の中に入った。F男が「ラーメン下さい」と言うとA子が作る真似をして「はいできました」と言ってラーメンを積み木の台の上に置く。F男は食べる真似をしている。後から来たG男とH男はコーヒーの注文をしている。「僕はコーヒー、お砂糖も入れてね」「僕もコーヒー、けどお砂糖はいらないよ」と全く大人そっくりの口調で言っている。

小部屋に入ったら、「火事だ！ 火事だ！」と叫んでいる。E子が「赤ちゃんがけがをした」と急いで赤ちゃんを抱っこして逃げる真似をしている。K男が「早く病院へ病院へ」と言っている。病院のお医者さんらしいM男が赤ちゃんの服を脱がせて叩いたりつついたりして「注射だ！」と言っている。看護婦らしいH子が注射する真似をしている。

エプロンをして粘土遊びをしている子供達は、始め細いひも状にしていたが、またそれをまるめておだんごのようにした。次は丸めただんごをペタンペタンと音をさせて机にぶつけ、形がいろいろに変わるのを喜んでいる。すべり台にすべっている子、絵本をみている子、ピストルごっこ、お絵画き、大工遊び等3才児の一人一人がそれぞれ違った遊びをして楽しそうに遊んでいる。さて以上述べたこの自由な遊びの光景を分析してみると、教師が〇〇ちゃん、カタツムリを観察しましょうと言って水槽を持ち出すのでもなく、積み木でお家を造りなさいと指図するのでもない。幼児達は自分の目で水槽のカタツムリを発見し、自分で思考を働かせながら積み木を並べたりくずしたりしているのである。まさしく遊びを自分の力でみつけ出し、遊んで(学んで)いるのである。そしてこのような自由な遊びの中にこそ生き生きとした幼児の学習(遊び)があるのでなかろうか。カタツムリって面白い形をしているぞ、ここに開いてある絵本にもカタツムリがいるぞ、カタツムリにもお父さんやお母さんがいるのかな？ カタツムリのご馳走はキュウリの他に虫を食べるかな、お肉も食べるかな？ 等と思考し、自分で絵本をみたり図鑑をみたり、疑問に思うところは自分で教師をつかまえて尋ねる。友達が意見を言う。この子達の話し合いの中には正しいこともある。想像したことを言い、間違いも言う、そこで3才児なりの討論が始まる。実にかわいくもあり面白い。又、積み木で家をつくるとき等、門を造るときは、両方の柱の高さを同じにしないと門はかたがるよ、柱は同じ形のものの方が格好がよい等と物の形について調べ、工夫しながら家を造っていく。このように楽しみながら思考し、どんな店に、どんな形にと創造していく。そしてそれぞれ友達同士がアイデアを出し合いながらの工夫が始まる。かくして幼児達は、自分の手で造ったお家やお店を大事にしながら、

つぎつぎと遊びを続け、そして発展させ、子供同士の自由なかゝわりあいの中で自分を発揮し、自主性のある幼児にと育っていくのである。

## 2. 環境構成の工夫

こうして幼児が自由に思いきり遊ぼうとする力（意欲）はどうしておきるのだろうか、それは、遊びを発見しやすい状態に準備すること即ち、環境構成の工夫があるからである。幼児が日常経験している生活の仕方に合うような具体的な生活環境を工夫することである。またこのことについては、次のような場合が考えられる。

（１）幼児が自らの判断によって自分の好むものを選び、それに必要な材料や用具を自分で用意して活動し、その後始末も自分でする。

（２）幼児が申し出て、教師が用意したり、幼児と教師が相談して用意する。

（３）教師が教育的意図をもって、あらかじめ用意し、それを勧めて行わせる等である。

自由な遊びの時間等で何もしないでぼんやり他児の遊びをみている子がいるがどのように指導したらよいでしょうと質問する教師の中には、この環境構成の意義を軽視している場合がよくある。例えば一ヵ月通して或は一週間、掲示物がそのまゝ動かないものであったり、幼児の作品がはり出したまゝであったり、遊具がいつも同じで同じ場所に置かれたままであったりすることは、幼児に何の刺激も驚きも、興味も与えないことになり、遊びを発見しにくい状態にしているわけである。

又幼児によっては、様々な遊具が用意されているにもかかわらず、常に遊びが固定している子、或は、ある一つの遊びだけはしたことがない、したがらないという子、について問題になることがある。即ち、A男は絵を画くことだけは毛頭しない、B子は鉄棒だけには絶対さわらない等である。このような子の扱いはどうするかということについて、幼児の自由にまかせておけばよい、極端な言い方だがそれが一年間一度も画かなかった、さわらなかったとしてもよいではないかと主張する保育者もいるが、幼児の自由を重んじる精神は否定しないが、一学期中、自分の好む遊び許して積木遊びは一度もしなかったということのないように、どの幼児にも、可能性を期待して努力することが必要だと考える。例えば、或るときは積み木のみの設定で遊ばせることも一方法ではなかろうか。そして自然に積み木にふれさせることから始めてみたら如何だろう、即ち、どの幼児に対しても、いろいろな種類の遊びを体験する機会を与えたいものである。要するに、環境は固定されず常に変動していくべきであり、教育課程、指導計画、日案の中の重要な分野をになうものであることを忘れてはならない。

## 3. 遊べない子への配慮

以上述べてきたような環境設定の工夫により、幼児の遊びは、より活発に展開されるわけであるが、そのことと平行して、幼児の細かい観察は欠かせないことである。とかく自由遊びをさせていると、つい放任してしまうことになりがちである。勿論自由遊びであるから、できるだけ手を出さないようにしたいものであるが、必要最小限の手は添えるべきである。先ず子供達には、見張っているように感じさせずに、よく観ていることである。そして教師も友達の一

人として、一緒に遊んでいるようにし、時々ヒントや刺激を与え、或は切れそうになった遊びを継続させたりする。特にぼんやりして遊べない子には、遊びのきっかけをつくってやる。例えば先生と一緒にままごと遊びをしようか、粘土でおだんごを作ってみようか等誘いかけたり、近所の仲良しの友達と一緒に遊ばせたり、家族のこと等話し合って気持ちを和らげる等の細かい配慮が必要である。

#### 4. 言葉づかい

「お当番さんは、ミルクとビスケットをきちんと机の上において下さい。他の人達は、静かに待って下さいね」「飲んでしまった人から好きな絵本を読んで待って下さい」「絵本を読み終った人は返しに来て下さい」「今からスキップをしますからまるい輪を作して下さい、〇〇先生の弾くピアノに合わせて元気に足を上げて下さいよ」「あらK子ちゃんそこに紙屑が落ちているからごみ箱にすてなさい」これは或保育の10分程の間に教師の口から出た言葉である。こんな言葉を毎日毎日耳にしている子供にとっては、それが習慣となって、〇〇して下さい、〇〇しなさいと教師から願望されるか命令されるかしないと行動を初めない受身的な子供に育っていきやすく、主体性のある幼児に育てることにはならないと考える。

「さあミルクの時間ですよ、お当番のA子ちゃんとB子ちゃん、ミルクやビスケットをお友達に分けてあげましょう。その時の教師は、教師という高い位置にいて指図するのではなく、幼児の坐に降りて、幼児と共にある、即ち当番と一緒に分けようとする姿勢である。今日は、多くの当番や、ミルクやビスケットはきちんと机の上に並べなくっちゃ。とさしずされないで、自ら進んでしようとする子に育っていく。又、スキップならこのようにあるべきだという既成の概念を教師という位置から教え与えていく姿勢ではなく、「先生と一緒にスキップしましょう、先生もみんなに負けないよ、K男ちゃん上手になったね、Y子ちゃんもがんばろうよ」と共に楽しみながら、教師も幼児達と共に仲良く遊ぶんだよ、一緒に〇〇しようというところから次第に発展し、深まりをもっていく態度こそ、自発性を重んじた指導につながると言えよう。

### III. 望ましい遊ばせ方

#### 1. 興味のある遊び

##### (1) ストーリーを大切にした遊び

指導者 北陸学院短期大学付属ナースリー・スクール江尻悠喜子教諭・高島幸子教諭

対象 3才児 期日 6月24日

「みんないらっしゅい」という先生の合図で自由に遊んでいた子供達は、部屋の片隅にきれいに椅子を並べてから先生の前に集る。「雨雨降れ降れ……」教師のピアノに合わせて立ったまま、歌い始める。教師は歌詞に合うようなペープサート（片面にはゾウ、片面には傘と家の絵が画かれている）を子供達にみせながら一緒に歌っている。

「今日は大きなバスに乗って何処かへ出かけようか」と教師の呼びかけから始った。「水筒と

おべんとうを持っていこうね」と言うと子供達は「おにぎりを持っていこう」と言う。「じゃおにぎりも持っていきましょう」「梅干し入れて、それから牛乳も持っていこう」等と子供達は、いつかの楽しかった遠足を思い出してかいろいろ考えて発言している。必要なものを全部リュックサックに詰める。「さあリュックサックをかぶこうね」と言うと子供達は重そうな動作をしてかついでみせる。「バスの運転手になりたい人は？」と問えば、全員一斉に「ハーイ」と大声で手を挙げています。「じゃみんな運転手だね、ではバスに乗りますよ」ピアノが弾かれるとみんなバスを運転しているように、ハンドルを回すような動作をし、キャアキャア言いながら2、3周位走り回る。「バスは止って下さい」の合図でピアノも子供達も止った。「さあバスから降りて遊園地迄歩いて行きますよ」手を大きく降って足を高く上げ元気一ぱいに歩いている。中には手足が一緒に(左手左足右手右足)動いている子もいてかわいゝ光景である。「一番先にすべり台の階段を登りましょう、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドとゆっくり一段登る毎にピアノの音が高くなっていく。子供達は力強く階段を登った。「さあすべりましょう」の言葉を耳にすると、嬉しそうな顔で「スー」と言いながらすべる真似をし「ドスーン」と言って転んでいる。そのすべり台遊びを2回繰り返した。「次は飛行機に乗りましょう」と言うと、子供達は両手を広げて水平にし、又その両手を左右に傾けたりしている子もいる。「お池の傍に来ました、今度はボートに乗ろうね」子供達は坐り、両手を前に出してのぼし、足とおしりをすべらせ手を回しながら、うまくボートをこいでいるようにしている。中にはまだ先刻の飛行機に乗っているつもりの子も混っている。「次はお馬に乗りましょう」と言うと、スキップで走り出す。パッカパッカという感じで馬になりきった様子。いよいよお弁当を食べることになる。「先生、ぼく牛乳とまちがえてお酒を持ってきた」という子もいて、「酔っぱらったあー」と叫んでいる。「食べ終わったらおながが一ぱいになったから次はお休みしましょう」の言葉と同時に静かな音楽が流れてきた。みんな仰向けにねたりうつむいたりして床に寝ころがる。それから帰りの準備をする。戻りは運転手のみでなくお客になりたい希望者も出てきた。「運転手さん出発お願いしまーす」「はい」と答えて、「ブーン」と言いながら、ハンドルを持つまねをして走り回る。「家につきましたよ、あゝ楽しかったね」と教師も満足そうだった。

それから長い電車になってトイレに行く。行きたくない子も電車なら興味があり、ついて行く。トイレから戻ると、用意された赤く縁取った蓑蓑と黄色く縁取った蓑蓑と緑で縁取った蓑蓑のいずれか好きなところに坐る。「今からねずみのしっぽとりをしようね」と言いながら、美しい赤、ピンク、青、緑の40cm四方位のジョーゼットの布地で作ったスカーフを出してきて、子供の洋服の後ろにくっつけて、ねずみのしっぽにした。赤色蓑蓑全員と、黄色蓑蓑半分の子供にしっぽが付けてあたり、実に嬉しそう。緑色蓑蓑の中にねこになりたいという子がいて、その中の2人がねこになった。しっぽのついたねずみをピアノの曲がなり終る迄追いかけてしっぽをとる。ピアノが止ると、ねこの手には色とりどりの美しいしっぽが一ぱい。一回目はみんなしっぽをとられてしまった。二回目はしっぽを押えて逃げる子や、早く走る子がいて、一回目程ではなくとれないねずみがいたようだ。

さてねことねずみのゲームが終わり、四角いスカーフは鳥の羽と変る「きれいなスカーフをお兄さん指につけましょう」ということで左右のお兄さん指にゴム輪が通され、いろいろの小鳥が生れた。小鳥の歌を歌い始めるピ・ピ・ピ・ピのところを最も強調して歌っている。「お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、赤ちゃんの鳥がいますね、今は夜だからみんな寝ましょう」と言うと、子供達は蓐座の上で寝ころぶ子、坐りながら両手を合わせてほっぺの所へ持っていきくびをまげて目をつむっている子等様々な格好である。「朝になりました、お父さん鳥やお母さん鳥はごはんを探しに行きましょう」レコードがなる。両手をはばたかせながらえさを探しに行く。それから、坐っている赤ちゃん小鳥のところへえさを与えるように、しゃがみ込んで、両手を後へやって、手を細かく振っている。それから教師の合図で「お家へ帰りましょう」ということでもとの蓐座に戻った。「小鳥の羽をはずして半分にたたみ、又それを半分にたたみましょう」と言いながら布を折って見せている。子供達は、半分にし、又半分にちゃんとたたんでいる。長四角の半分の子もいれば、三角の半分にしていた子もいた。これは9時50分～10時30分の3才児の遊びの一駒である。バス遠足という幼児の最も興味を持つものや、小鳥の親子の愛情の表現等が巧みにストーリーの世界に誘いこまれ、その上二人の教師の意気投合、そしてピアノのリズムや、レコードの曲が幼児の動きにマッチしていたことが3才児を40分もの長時間飽きさせることなく楽しませたのだと考える。

## (2) ねらいをむきだしにしない指導

指導のねらいや、教師の意図すること、そのものずばりを直接的に当ることは、幼児にとっては味気ない言葉としか聞きとれないことが多い。「遊ぶときは熱中してよくやるのだが後片づけとなると一向に教師の言うことを聞いてくれないのだが」の質問をよく耳にする。「さあ今から後片づけしましょうきちんと整頓するのですよ」といった、ねらいをむきだしにした言葉かけになりやすい。これでは、年少の幼児にとっては片づけようという意欲はあまりおこらない。それより、「さあ車を車庫に入れましょうか、積み木で高いビルディングを造りましょうか」等の言葉かけは、みごとに幼児をして興味ある行動へと持っていくものである。

又、級全員が椅子に坐ってさわがしくしているとき、「しゃべらないで静かにしなさい」と注意するより、手遊びをして集中させたり、「A子ちゃんは立派な姿勢をして、先生の話聞いてるよ」との賞詞を与えることにより他の子達は自分もほめてもらいたいということで、一斉にA子のみ習って静かになる。全員の口を閉じさせ聞く態度にもっていききたいとの教師の意図も、「静かにしなさい」の直接的な言葉かけでは効果は少い。

## (3) アミニズムを活かしての指導

それから幼児のアミニズムを活かしての指導も忘れられないことである。手洗い場で手を洗っていたとき、きちんとコップの後片づけがなされておらずちらかっていた。「あらあらコップが迷子になっているよ」と言った教師の言葉に、子供達はニコリ笑って、コップの帰る家(つり手)を探してつるしていた。「誰ですか、コップをほったらかしてあるよ、きちんとかたづけなさい」では感心しない。草花に水をやらせるとき、「朝顔が、のどが乾いて早く水をほしいと

言っているよ」との話しかけは、幼児にとっては、かわいそうに早く水をやろう、という気持ちになって、毎日忘れないで水やりをしてくれるものである。

## 2. 思考力を育てる遊び

遊びもただ面白いというだけでは、教育的意義の薄いものであり、思考力を育てる遊びでなくては幼児の創造性を培うことにはならない。しかしこの遊びも、興味のないところには成立し難い。又、何か難しいことを考えさせるような保育を想像し勝ちであるが、そうではなく、日常の保育の中で、思考の場をつくり出すことができるわけで、教師が何気なく処置する中に吟味していかなければならないことが数多くある。

集合の合図があって、幼児達はきちんと集まっているのに4才児の2人がトイレに行ったのになかなかもどってこない。やっとのことでへやに入ってきた。教師は、「みんなおそいのでどうしたのかな?、と待っていたのよA男ちゃんB男ちゃん、どうしたらよいかね」と問いかける。2人とも、ちょっと考えていた。「おそくなってすみません」と、自分で思考しあやまった。このような場合、「あらあらおそかったわね、みんな待っていたのだから、おそくなってすみませんてあやまりなさい」と言ってしまいがちである。この両者を比較してみると、前者は、幼児に思考の場を与え、幼児の中にあるものを引き出そうとしているが、後者は、思考の場を与えず、いきなり押しつけの指導として終っている。

又、楽器の指導のとき等、「ハンドカスタは左手の中指にはめて、こうして右手で上の方からたたきましょう、鈴は右手にこのようにして握って振るのよ、タンバリンは左手に持ち、この穴に親指を入れて右手でこのようにしてたたくのよ」と幼児に教えこむ。それよりも、「A子ちゃんの鈴の振り方をちょっと聞いてみよう、B男ちゃんのトライアングルの音、美しく聞えるね、どうしてだろう?」等と、子供達に美しい音色が出るたたき方をみつけさせる、発見させるのである。子供達は耳を澄まして聞こうとする。なぜへんな音に聞えるのか考える、自分達でためしてみる、そして自分達でよい音の出し方を発見していく。このような発見の方法だと、次の段階で色々な場で応用され、創造されていく。教師の方から、こうしなさい、こうたたきなさいと何の思考の場も、時間も与えられず、行動のみ与えられていくならば、指示のあることしかできなくなる子を育てることになる。

### (1) 幼児の発言を大切に

したがって幼児をして、よく思考させながらの保育の展開を工夫しなければならないわけであるが、それには先ず幼児の発言を大切にしながら意欲的に遊びに参加できるように進めることである。5月の或る日のこと、Y幼稚園によくつばめが巣を作りにやってくる。この様子を幼児がみつけたのである。「先生2階のテラスの所にいっぱい鳥がいるよ」と大発見でもしたように話しかけてきた。教師はこの子供の言葉を非常に大切にしながら、教師自身も心からの驚きとして、級全員の子供を連れて2階のテラスへ見に出かけた。「あっ、又とんできた」「えさをやっとなる」「えさおちんかな」「ワシが攻めてくるといかんから守っとなるんや」「あっどっかへとんでいった、どこへ行くんやろ?」「お母さんおなかすかんのかね」等と話合っていた。教



師はその会話を一言も聞き落とすことなく大事にしながら、上手に保育室の十姉妹や、家や近所にいる小鳥のことに触れられた。そのことがあってからは、保育室の十姉妹に水やえさを与えたりする世話を喜んでするようになり、えさを食べる様子等をよく観察するようになった。そして、次のような展開がなされた。

指導者 加賀市立山代幼稚園寺西幸子教諭

対象 5才児期日（5月13日）

題材 小鳥になって 「遊びを通して運動能力の芽ばえを培うにはどうしたらよいか」の研究紀要より

ねらい 遊びに必要なものをみんなで考えて作る。

小鳥になっていろいろなとび方をし、上手にとべるようになる。

展開

「幼稚園に遊びにくる小鳥のように、わたし達も小鳥になって、面白い遊びを考えようか」と教師の誘いかけに、「わたしら小鳥の王様(かごめとよく似た遊びで、王様にあいさつの握手をされた子が輪の真ん中へ入って王様になる遊び)したい」、ぼくもわたしもということで、小鳥の王様のグループを作る。「わたしら小鳥の巣で遊ぶのをしたい」と2つ目のグループができる。「ぼくら木の枝を飛び越える遊びをしたい」ということで3つ目のグループができ上る。こうしてA、B、Cの3つのグループが自発的につくられた。さあ、それから遊ぶのに必要なものをつくる相談が始まる。Aグループは王様の冠をつくる、Bグループは小鳥の巣を画いたものを積み木にはる。Cグループはゴムとびのゴムを準備し、木を画いて積み木にはりつける。教師は3つのグループの遊ぶ位置をそれぞれ決めた。そして遊び方も幼児の相談相手という形をとりながら決められていった。このように、グループ作りも、遊びの種類や方法も、準備も、教師を交えて、幼児達が自分達で考え、自分達で作り、自主的に友達とかゝわり合いながら、意欲をもって楽しく遊びを展開していったのである。

又、H幼稚園での5才児の音楽鑑賞の保育をみて感じたことだが、教師は美しき青きドナウの曲を聞かせている。「みんなこの曲を聞いてどんな感じがしましたか？」と質問している。しばらく幼児達はだまっていたが、オカッパ姿のA子が、曲に合わせて体を動かしながらヴァイオリンを弾く真似を始めた。B子は「小鳥みたい」C子は「バレーのおどりみたい」と言った。しかし教師は、この3児の動作や発言がみな意に添わないよう指導案作成の時に考えた、大きな川のようにゆったりとした感じがする！と答えてほしかったのである。何度発問しても幼児の中からその答がかえらなかった。ついに、教師の口から、「ゆったりとした大きな川のような感じがしませんでしたか？」と言ってしまった。幼児達は何の反応もないというか、不審そうな顔をしていた。折角幼児達は幼児なりの感想を言っているのに、それを無視しての指導であり、無味乾燥の保育として終った。A子の動作でも、B子の小鳥みたいの発言でもC子のバレーのおどりみたいの発言でも、どちらでもよいが、その5才児らしい発想を大切に、「A子ちゃんがしているように曲に合わせて体を動かしてみようか、B子ちゃんの言うように、小鳥に

なって歩いてみようか、バレーのようにおどってみようか」と言うところから入りこんでいったら、幼児達は、自分たちがみつけた遊びとして、意欲的に楽しく遊び、学んでいくことであろう。“教育とは引き出すことである”とされているがまさしくこの子供達の中にあるものをうまく引き出していくことだと考える。

## (2) 思考の場の設定の工夫

興味深く思考させるには、先ず題材の選択が問題になる。又同じ題材でも、興味をもって思考できるような教師の配慮が望ましいわけで、遊具や材料の準備の仕方、助言の与え方等によって、幼児のもつ知識や想像・創造をフルに活かし、下記のような深みのある展開にすることができる。

指導者 加賀市立京達幼稚園谷本操教諭

対象 5才児期日(7月13日)

題材 舟づくりをする(船長の冒険)「昭和53年度県、教育課程発表資料」より

めあて。舟づくりに興味をもち、最後までがんばって作る。

・舟のバランスに気づき、材料を選び工夫する。

教 師 の 配 慮	幼 児 の 思 考
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由に材料を選択できるように配慮する。</li> <li>・くぎやかなずちを使うときは、安全に気をつけるよう指導する。</li> <li>・質問に対しては、すぐ解答せず、教師も共に考えてみるようにし、できるだけ幼児の方で気づくようにする。</li> <li>・こわれたり、うまく浮かばないときは修繕したり、つくりなおすように励まし工夫する楽しさを育てる。</li> <li>・個人思考をしている場面を周囲の友達に知らせたり、全体にも及ぼすようにする。即ち個人思考からグループ思考、全体思考へと及ぼす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板の厚さとかぎの長さに気づいた幼児達は、板とかぎを合わせて比べている。</li> <li>・発泡スチロールと木をくっつけようとして、くぎを打っていたが、それが無理だと気づく。</li> <li>・ヨットを設計した幼児は、帆に発泡スチロールのあき箱をつけて浮かばせている。そして風によって動くことを知った。</li> <li>・木で作った舟を浮かばせてみると、かたむいた、軽い方にもう一つの木をくっつけてなおしている。</li> <li>・木をくっつけるのにボンドを利用した幼児は、つけてすぐ水に浮かばせると、こわれてしまうことに気づき、少し時間をおいてからつければよいことがわかった。</li> <li>・箱を使った幼児は紙が水に弱いということがわかり、舟の下に発泡スチロールをつけて浮かばせていた。</li> </ul>

## 材料、用具

木片（厚さの違ったもの4種類）、くぎ（長さ6.5cm、5cm、4cm、3cm、2.5cm）かなづち、ペンチ、くぎぬき、牛乳パック、発泡スチロール、あき箱、ジュースやビールの栓、アイスクリームのあき箱、竹ひご、輪ゴム、ストロー、割箸、厚紙、色紙、油性マジック、セロテープ、ビニールテープ、紙テープ、ボンド、ホッチキス、たらい、木工台

## 3. 総合的な指導について

昭和51年度教育課程地区別研究会を実施したときのことである。各幼稚園よりの実践例を持ちよって討議を進めた中で、園によっては一日の指導の中に、形式的に6領域が含まれているから総合的指導がなされていると誤解して指導されているところがあった。小学校のように一限目は算数、二限目は音楽、三限目は国語の時間ということで何の関連もない切れ切れの指導が6領域揃っていても、望ましい総合的指導にはならないので、幼児というのは未分化だから、幼児の生活経験に即した総合的な指導でないと興味や関心を示さず、効果が上らないということである。これは献立と栄養素の関係によく似ていて、6栄養素を全部取り揃えるようにということのみ考えていると、それぞれ好みにあった料理をおいしく食べ得る献立にできないと同じことである。即ち或る題材をとり上げた場合、必ずしも6領域が含まれていなくても、4領域にまたがる指導で効果が上がるなら、その方が望ましいわけで、そのことが一週間、或は一月、一学期間、一年を通して6領域がかたよりなく経験されるならばよいわけである。尚総合的指導については、単に幼稚園のみでなく、小学校低学年にも望ましい指導法として研究を進めている学校があるので参考までに金沢市立諸江小学校の実践を紹介する。

指導者 上保禎子教諭、単元研究の実践第5号より

対象 1年 期日（6月上旬）

単元名 カタツムリ

設定の理由

自然のもつ偉大さ、すばらしさに子供達はまだ感動を示してくれない。しかし自然は子供達の遊び場である。目をキラキラさせて、土を堀りかえし、ミミズに驚き、幼虫探しに夢中になっている姿に接したとき、子供達に自然の中で、もっともっと多くの経験をさせてやりたいと思った。当校下には、田畑や樹木がみられ、カタツムリを見かけたり、つかまえた経験をもつ子が案外多い。そのような子供達をいかし、無関心であった子供達にも関心をもたせ、興味をもって自然を見つめる目を育てていきたい。

展開

。カタツムリと仲よしにさせたいと願って全員で採集に出かけた。初めはなかなか見つからなかったが、そのうちに木にくっついているのを見つけた子から歓声がる。又畑に働いているおばあさんに話しかけてキャベツの葉から採ってもらったり、草むらへ行って、ぬれた葉をかき分けて夢中で探し始めた。早くつかまえた子は頭が出た！ つのが出た！ と大喜びだった。

ビニールの袋に入れて嬉しそうに眺めている子もいた。子供達は自分の足で、手で、カタツムリを探す中で、どんなところにカタツムリがいるのか、おぼろげながら感じとっていたようである。

◦次はカタツムリと自由に遊ぶ

子供達は夢中になってはう競争、相撲、けんか等をさせている中に一属興味を深め、さらに工夫して、網渡りや鉛筆登りの遊びを考えだしていた。こうして遊んでいるうちに、カタツムリのからだのしくみや、動きをとらえていたようである。

◦カタツムリを絵と工作で表現する。

A 学級では、最初にカタツムリとしばらく遊んで、すぐ絵具で自由に画かせたら、思い思いの絵を大きな画用紙一ぱいに、のびのびと創造的に感動を表現した。B 学級では、カタツムリの観察を終えた後、自由に画かせたら、からやからだの模様、それに大小のつのみまで客観的に表現した。

カタツムリの好きなものは何だろう、嫌いなものは何だろうという話し合いの中から出てきたことを4枚((1)(2)(3)(4))のふすま紙に画いて用意する。(1)…トマトの絵、(2)…キュウリの絵、(3)…鳥の絵、(4)…太陽の絵が画かれている。鉛筆を使って紙が丸められることのヒントを与えて、それぞれカタツムリを作らせる。作ったカタツムリを4枚の紙に各自自由にはらせる。A 男は(3)の紙には「食べられないように逃げろ逃げろ」とつぶやき、かたつむりを動かしながらはっている。B 男は、(1)のとまとのところにはっている。足を浮かせて楽しそうに何度も往復しいくつも作ってはっていた。この子にとっては束縛のない時間のようだった。C 子は、(1)の紙にはると言っていたが、作ることが楽しくてなかなかはりに行かなかった。後から大急ぎではりつけていたようである。時間が終わってから、「先生まだ作りたい」というので残っていた紙テープを与えた。家へ帰って作るのだそうだ。出来上りは、(1)(2)の紙には、沢山のカタツムリが喜んでとまとやキュウリを食べに集まっている様子が表現され、(3)(4)の紙には、鳥や太陽をこわがって、かたつむりが後向ききになって四方へ逃げ散る様子がうまく表現されていた。これらの表現をしたときは、どの子も生き生きと目を輝かせ、自分達の考えで、主体的に作業をしていた。この総合学習を通して、子供達は時間のある限り、夢中になり学習に熱中してきた。教科学習ではあまり活動しない子も含めて全員がこの単元のどこかで自己表出ができた。そこに自ら求めることの喜びがあり、教科学習の中では見られぬ内部にある力のすばらしさを知ることができた。

#### 4. 指導の流れの工夫

非常に緻密に計画し、準備された指導案のもとに指導しても、導入段階で失敗すると、最後まで幼児にぴったりこないまゝ終ったり、導入・展開がうまくいってもまとめの段階でこわしてしまうことがある。

「今日先生は、タンポポぐみ(5才)のみなさんに面白いお話を聞かせてあげようと思ってね、おサルさんを一匹連れてきました」幼児は一瞬、キョトキョトの眼をし、ケラケラ笑いながら

サルがどこにいるか探しているようだった。それは参観していた大人にも同じように面白くうけとられた。ところが大きなペープサートのおサルであった。幼児達は生きたおサルをみるように、生きたおサルのお話として最後まで真剣に教師の話を聞いていた。これは幼児の心にあるアニミズムをうまくとらえての導入であったと思われる。

幼児の生活の中には、あれっ？、どうしてなの？、何だろう？、何しているのかな？、へんだな等の興味や疑問から出発したおどろきの言葉をよく耳にするが、この言葉の中には、幼児の問題意識の芽ばえが感じられ、しかも幼児の心の中には、教師の適切な指導を受け入れようとする意欲的なものがあると考えられる。したがって保育の展開を考えると、先ずこのようなおどろきや疑問を活かすようにし、導入段階では、予想させる、課題をもたせる、今から何をするのかはっきりめあてをもたせることである。即ち聞こうとする、作ろうとする、歌おうとする意欲を起こさせることである。展開ではそれらを受けて、予想をねる、表現する、深める等のプロセスをふみ、まとめの段階でよく味わう、発展する等ということになる。つまり、聞いたこと、作ったこと、歌ったことが良い状態で次のステップへ気持ちよく活かされていかなければならないのである。

#### Ⅳ．視聴覚教材の利用

##### 1．幼稚園教育と視聴覚教材

七匹の子ヤギの劇をするのに、ヤギやオオカミの面をつけたときと、つけないときの子供の喜びようが違う。前者は本当にオオカミになりきる。或はお母さんのお話をするとき、教師はエプロンをつけ、手ぬぐいをかぶると、子供は一層楽しんで話を聞こうとする。幼稚園の視聴覚教材、教具ということになると、或るときはこのような簡単な面であったり、或るときは衣装であったり、その他、指人形、ペープサート、紙芝居、絵本等であり、仰々しいものよりも手軽で効果的と言えよう。したがってこの程度の視聴覚教材、教具は、どの幼稚園でも利用しているようである。ところが現在小、中、高校等で盛んに使用し効果を上げているものの中にO・H・P等の教育機器がある。このような機器を幼稚園でもうまく利用しているところがある。

##### 2．OHP利用について

さてOHPには、種々の提示法があり、幼稚園では、合成分解法、具体物置換法・実物提示法・動画的提示法等が適しているので、その実践例を「視聴覚教材利用実践記録」より紹介する。

###### (1) 合成分解法

指導者 山中町立山中幼稚園 桐本真智子 教諭

対象 5才児 期日 (5月25日)

題材 きれいな

ねらい 手洗いの仕方や、手洗いの大切なことを知る。

教 師 の 働 き か け	幼 児 の 反 応
<ul style="list-style-type: none"> <li>・OHPの見やすい場所へ、椅子を運ばせる。</li> <li>・シート①を見せる。「何に見えるかな」</li> <li>・シート②を①の上にのせる。</li> <li>・シート②をはずしシート③をのせる。「何をしているのかな」</li> <li>・「そうね、 気をつけようね」</li> <li>・シート④をのせる「みんなの中で、こんなことする人いないわね」</li> <li>・シート⑤をのせる</li> <li>・「みんなごはんの時の他に、どんな時に手洗う」</li> <li>・「なぜ手を洗うの」</li> <li>・「そうね、手はよくこすって、きれいに洗ってから、ふくようにしようね」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まるや、鏡や。</li> <li>・あっ、子供が手を洗っている。水道をひねって洗っているんや。</li> <li>・手をふかないで、パッパとしている。廊下のところで、ぬれたままの手でいる。</li> <li>・あっタオルや、ハンカチあるのにふかんのや</li> <li>・あっごはん食べている。手、洗ったからごはん食べてるんや。</li> <li>・便所へ行った後、粘土した後、砂遊びした後、幼稚園へ来た時、外遊びから帰った後。</li> <li>・ばいきんがおなかの中へ入っておなか痛くなるから。</li> </ul>

これは、オーバーシート（元になるシート）に、2枚以上の複数のシートを重ね合わせたり、或は取りはずしたりしながら、行動のプロセスを投影する方法である。この合成分解法は、OHPという機器の構造があってはじめて可能な教材提示の方法であると言えよう。シートを重ねて出し、その時の情景、内容を変えたとき、子供達は、とても興味をもちくい入るように見ていたのが印象的である。注、シート（1）には人間の頭と胴の絵があり、シート（2）には足と水道のカランから水が出ている絵があり（1）から（5）までのシートを順に重ねていくと人間の体になり、手を洗ってから食事をする絵と変っていく。

#### （2）具体物置換法

指導者 松任市立東幼稚園近藤千鶴教諭

対象 4才児 期日（7月12日～7月15日）

題材 魚と遊ぼう（単元水遊び）

ねらい OHP“海の探険”を見て思ったことを話す。

教 師 の 働 き か け	幼 児 の 反 応
<ul style="list-style-type: none"> <li>・海の中を思わせるバックシートを準備する「どこかな？」潜水艦を画いたシートを出す。</li> <li>・「ねえこの潜水艦今からどこへ行くとする」シートを少しずつ動かしていく。</li> <li>・「おやおや、何か来ましたよ」たこを画いたシートを出す。</li> <li>・「ねえ、たこさん何してるのかしら、何して遊んでいると思う？」</li> <li>・「ねえみんな、このたこさん誰だと思う？」たこを画いたもう一枚のシートをのせる。</li> <li>・「今度、又何かやって来ましたよ」潜水艦を画いたシートを出す。</li> <li>・「たこさん、大丈夫かな」</li> <li>・「あれあれ、どこへ行くのかな？」たこのシートを少しずつ動かしていく。</li> <li>・青い魚を画いたシートを出す。「何匹いるかわかる？みんなこんなお魚みたことある？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初わからないようだったが、しばらくして、わかった！海や！</li> <li>・海の中、入っていくがや、ほうや、海の中ずっと入っていったらいいかもしれんよ等の発言</li> <li>・あったこや！たこや！と数人の幼児が元気に話す。</li> <li>・遊んどるがや、かくれんぼしとるがじやないけ、おにごっこかもしれんよ。</li> <li>・父さんたこと、母さんたこや、ほうや一緒に遊んどるのや</li> <li>・あっさっきの潜水艦や、わあっ本当やあつ、たこの方へ近づいてきた。</li> <li>・たこ、潜水艦やて知らんがなんいけ、そうやし見とるがや。</li> <li>・たこさん、潜水艦についていったんでないけ、一緒に海の中もぐっていったんや</li> <li>・あっ青い魚や、5匹や、うんあるよ、ぼくのお父さん、つりに行ってこんな魚つってくるげぞ、そうやぼくのお父さんも行けぞ</li> </ul>

これは従来のフランネルボードやマグネチックボードを用いた使用法と似た方法である。即ち、無色あるいは有色の透明板で様々な具体物を作り、OHPのステージ上に並べたり置き換えたりして、物の配置や移動の様子を具体的に示すもので、具体物（魚や潜水艦等）を置き換えながら、つぎつぎと学習者に想像させ、話を作っていくのである。

### （3）実物提示法

ア

指導者 山中町立山中幼稚園桐本真智子教諭

対象 5才児期日（5月19日）

題材 いろいろなものをうつして遊ぶ。

ねらい いろいろなものをOHPにのせると形がうつることに興味をもつ。

教 師 の 働 き か け	幼 児 の 反 応
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由な遊びのときに保育室にOHPを置き、スイッチを入れた。</li> <li>・教師の手をOHPの上にのせる。</li> <li>・「みんなも、写したいと思うものを写していいよ、でもねOHPの上にのせるときは、そつとのせてね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あっ、幻燈が始まるのかな？、違うよ映画や、早く写して。</li> <li>・うわー、大きな手や…と歓声を上げながらOHPのまわりに集ってくる。</li> <li>・先生はさみでもいい？ 子供達は、クレヨン、マジック、のり等写して喜んでいました。</li> </ul>

イ

指導者 山中町立山中幼稚園桐本真智子教諭

対象 5才児期日（5月28日）

題材 小動物の観察

ねらい ザリガニとカニの違いを見つける。

教 師 の 働 き か け	幼 児 の 活 動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・A男にどこでとってきたのか話させる。</li> <li>・OHPの上にザリガニをのせて、一緒にみる。</li> <li>・飼育していたサワガニものせてみる。</li> <li>・「ザリガニと、サワガニのよく似たところはどんなところかな、違うところはどんなところかな」</li> <li>・子供の発言からOHPの上にザリガニをのせ、一人の子にさわらせてみた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A男がバケツにザリガニを入れて登園した。それをみてワッと5、6人の子供が寄ってきて、どこでとったんや、ここ持っと大丈夫やぞと話し合っていた。</li> <li>・全員の子がA男の話を聞いている。</li> <li>・あっ長いひげや、はさみがある、カニみたいやね、そうやカニの仲間やと話しながらみている。</li> <li>・保育室には、一週間程前からサワガニを飼育していたので子供達は、二匹を比べている。</li> <li>・はさみと足や、背中や、どっちも川に住んどる。</li> <li>・ザリガニのからだは長いけど、カニは四角いよ、ザリガニは前に歩くけどカニは横に歩くよ、ザリガニはしっぽがあるけどカニはないよ。</li> <li>・ザリガニのしっぽをおさえるとピョンと後にとぶよ やっぱりとんだやろ。</li> </ul>



以上、実物提示法による2例を示したわけだが、前者(ア)は、子供にとってはOHPというものに始めて触れさせたときの活動である。この時、切り抜き絵を写している子がいて色が写らなく、影だけでも少しも不思議さを感じないで、ただ喜んでいた。そこで教師はTPシートにマジックで絵を画いてのせたところ、あれっという表情で驚いていた。自分達のは色をぬっても影しか写らないのに、先生のは何故かしらとの疑問から透明なものに画くと色彩が出ることがわかったようだった。又後者(イ)の場合は、OHPのステージ上に実物をのせ、拡大投影する方法で、ここにのせる実物は、一般に透明な材料によって作られたものであるが、なかには、上記のような不透明なものをシルエットで拡大投影することによって効果を上げることもできるのである。

#### (4) 動画提示法

指導者 松任市立東幼稚園宮腰悦子教諭

対象 4才児 期日(10月23日～10月28日)

題材 乗りもので遊ぼう(単元乗りもの)

ねらい いろいろな乗りものに興味、関心を深めると共に、遊びを通して、友達関係を広める。

教 師 の 働 き か け	幼 児 の 活 動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由な遊びから自然に無理なく教師の意図する活動へともっていく。</li> <li>・「みんな先生のところへいらっしゃいみんなの作った道のお話聞かせてね」</li> <li>・「いろいろな道がありますね、今日はいろんな道を通して旅行に出かけようと思ってバスを作ってきたの」と言ってTPを出して写してみせる。</li> <li>・「すみれ組のみなさん、みんなこのバスに乗って面白いところへ行こうよ」</li> <li>・「さあ、みんな乗ったかな」</li> <li>・「あれあれ、バスの中でさわいでいる子がいるよ、出発していいですか？」</li> <li>・「さあ出発！」と言い風景の描いてあるローラーシートをまわし、その上をバスが走るように操作する。</li> <li>・つぎつぎとシートを回す。川を渡り、港を通り、坂道のある山を越えて飛行場</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登園した幼児がつぎつぎと設定してあった積み木・ブロックを使って道作りをして遊んでいる。</li> <li>・ぼくらトンネル作ったよ、ぼく自動車でくるし、自動車の一ぱい通る道作ったよ、わたしら田んぼ道作ったよ。</li> <li>・わあっ、バスや！</li> <li>・うん乗ったよ</li> <li>・一斉にシーンとなる、いいよ。</li> <li>・橋や！、川のところ走っとる。</li> <li>・うん、あるよとC子が答えた。</li> </ul>

にやってくる。「みんなこんな飛行機みたことある？」

・「ほうら、曲りくねったきのこ山を登って行きますよ、おやおやバスは遊園地のところにやってきましたよ、みんなどうする、ここでしばらく遊びますか？」

・ぼく、あんながに乗ったことある。

・うん遊びたいと一斉に発言。

この場合のシートは、長く一枚になっていて順番につぎつぎと右から左へ巻いていくように回転させ、興味をもたせるものである。上記の例は、バスに乗っての旅行だが、山や川、港、街、信号等の風景をバックにバスは動く。風景は切れ切れにならずに最後まで連続して見れるところが特長である。場合によっては偏光板を利用して雨が実際に降っているようにも見せられるし、川の流れ等も本当に水が流れているようにもすることが可能である。したがって子供達は映画を見るようにして喜ぶ。即ち動画的提示法というのは、OHP のステージ上に、クリアシートとセロハンロールの重ね合わせ、あるいはセロハンロールを背景にペープサートやミニチュアなどを操作して投映し、一種の OHP によるアニメーション的な提示画面を作り出す方法である。したがって特色として、学習者に深く興味や親しみをもたせ、工夫によっては、一つのまとまった筋のある叙述ができ、創造活動をさかんにするものである。

#### (5) 幼児の自作自演

指導者 松任市立東幼稚園近藤千鶴教諭

対象 5才児期日(10月19日～10月27日)

題材 虫と遊ぼう(単元秋の自然)

ねらい。お話づくりに興味をもち、みんなの前で進んで話をする。

・グループの中で役割を受け持ち、協力して遊ぶ。

#### 展開

・TP作りと役割を決める

TPシートに画いた“アリとキリギリス”の話を、教師はOHPで写してみる。A男が「先生ぼくもそんなシートを画きたい」と言う。みんなの意見を聞くと、みんなもしてみたいと言う。「昨日グループで好きなお話を作ったから、その話を先生がしたようにTPシートに絵を画くことに決めた。昨日子供達を作った話とは、“トンボとバッタ”…Aグループ、“鈴虫のいたりきたり”…Bグループ、“コオロギのおうち”…Cグループ等である。それぞれグループで相談する。自分がお話のどれを、何を画くかを決める。幼児達は楽しそうに、コオロギやカブト虫、野原等を画きペープサートの様にして作っていった。「あんたちょっとここおかしいよ」「もっときれいにかかんなんよ」等と言葉をかわし合いながら協力して作っている姿が見られた。次は役割を決める、即ち、お話する子、OHPで操作する子、歌う子の三つの仕事を分担することにした。OHPの操作の仕方や話し方、歌い方、聞き方等の注意は、教師は一方的に説

明するのではなくて、幼児の発言を大切にしながら納得させていく。

。お話し会をする。

愈々お話し会が始まる。子供達は歓声を上げている。「今からトンボとバッタのお話をします」とC子が紹介する。H夫とF男は、OHPのスイッチを入れ野原を書いたシートをのせる。「ここは野原です、そこへトンボが飛んできました」トンボのシートを動かしながらのせる。「バッタさんも遊びに来ました、ピョンピョンピョンと飛んできました。バッタさん何かして遊ぼうよ、とトンボが言うと、だめぼく働かなくてはいけないんだ、もうすぐ冬がくるだろう、だからごちそうを一ぱい集めているんだ。では、バイバイ。バッタは忙しそうに帰って行きました。トンボはつまらなかったの一人で飛んでいました」OHPを消し、バッタの家を画いたシートをのせる。「バッタはおうちに帰りました。そこへぼろぼろになったトンボが、よいこらしよと歩いてきました。ここはどこのお家かな？ トントントンとたたいてみました。なんだトンボさんじゃないの、どうしたの？ その格好は、ぼくおなかがぺこぺこなんだ、少しごちそうわけておくれよ、いいよはいりなさい。トンボはごちそうをもらいおなかが一ぱいになったのでお歌を聞かせて上げました。」T子とK男はマイクをもって“手をつなごう”を歌いました。発表したグループの幼児達は生き生きと活動しており、めだたない幼児もシートを動かしたり歌ったりして自分の役割を果たしていたようだった。自分達の作ったTPシートが大きく画面に映るので喜びようは一入だった。

さて、上記の実践例からも理解できると思うが、OHPが持つ特色(幼稚園教育で必要とする)をまとめてみると、

- (1) 暗幕等必要とせず、明るいところで近距離から映写できる。
- (2) 幼児と対面した保育ができる。
- (3) トラペシートの自作が容易である。
- (4) 操作が簡単であり、専門的な知識や技術を要しない。
- (5) 幼児の思考のプロセスや理解の速度に合わせて提示することができる。
- (6) 映像に対する幼児の興味、関心が強い
- (7) (3)(ア)(イ)の実践例のように実物がそのまま拡大され、立体的なものが写される。
- (8) (4)の実践例のようにロールシートや偏光板を利用して動的变化が出せる。
- (9) (5)の実践例のように、幼児にTP作成に参加させ、自作自演、自主的、自発的遊びへと導くことができるなどである。

### 3. TV利用について

紙芝居やスライド、OHP等は、幼児の反応を見ながら、教師と幼児の交流がなされるがTVはただ一方通行的であるのでそれによる弊害は考えられるが、他のもので観察し得ないものを見る機会を得、接することのできない景観、場面を見ることができる長所も多い。したがってそれぞれの長短を明らかにしながら、TV利用の工夫が必要である。幼児向きのTV番組はその専門家によって偏集され、毎年反省を重ねた上で修正されてはいるものの矢張り、地域によ

ては幼児の発達や特色によってぴったりこないものもある。県下の幼稚園では TV のない幼稚園はなく、利用していない幼稚園はないと思うが、その利用方法によって、いささか問題をかかえているようである。一日のプログラムの中で幼稚園側の教育的意図と放送局側の編集の意図とが一致しないことが多く、只単に、○時から○時までは TV を見る時間ということで視聴しているところがあるようだが、そうではなく、今日の指導の目あてをこんなふう計画したからこのような内容の TV を見せるのだというのでなくてはいけないと思う。ただし、継続視聴に意義をみだし、カリキュラムを編成しおこなっているところについては一概に言えないだろう。

矢張り TV も保育を展開するときの導入に使ったり、展開そのものに利用したり、まとめに使ったりの工夫が必要である。したがって TV の内容を指導するのではなく、TV の内容で指導するのである。さてこのようにして深く指導のプロセスを考えていくと、TV の流される時間帯や時期、テキストの内容のくい違い等から必然的に VTR 等が必要となってくる。(生放送は生放送としてのよさがあるのだが) ここまでくると、各園の予算等の関係から、一般的には、むずかしいことかもしれぬが、継続視聴や VTR 利用を通して研究された実践例を「視聴覚教材利用実践記録」より紹介する

#### (1) 継続視聴

指導者 松任市立東幼稚園平田智子教諭

対象 4才児期日(9月13日～9月18日)

題材 みんな仲よく(单元運動会)

ねらい ルールを守り、友達と仲よく遊ぶ

#### 指導計画

1. “第16回風の子ケーン”を視聴する
2. 話し合いをして、役作りをする。
3. 風の子ケーンの登場人物の面を作る。
4. グループでいろいろなゲームをする。
5. “第17回風の子ケーン”を視聴する。

#### 展開

登園後すぐにおきたけんかのことについて話し合う。「A男ちゃん達どうしてけんかしたのかしら」の問いに、いろいろな意見が出る。「みんなだったらどうかしら、お友達とけんかするのどう思う?」「うん、けんかしたらだめや、仲よく遊ばなんよ」「そうねやっぱりどんなお友達でも、仲よく遊んだ方が楽しいわね」という話し合いから、仲よくゲームをするという方向へ導いていく。先ずゲーム(フルーツバスケット)のルールについて話し合い、必ず守ることを約束する。各々自分達で作ったケーン・ミーン・アランの面や髪飾りをつける。それぞれの役を確認してから鬼を一人選ぶ。ゲームが始まると、正しく移動できたかを確かめながらゲームを進める。鬼には大きな声で話すようにさせる。中にはわざと鬼になりたくて、ゆっくりと

移動する幼児も2、3人みられた。「あっD男ちゃん鬼になりたいがや」「あそこあいとるがにすわらんよ」と他の幼児から注意される場面もみられた。面や髪飾りを静かに片づけテレビ視聴の体形にすわる。

・視聴前の話し合い

「この前のケーンどうだったかしら?」「けんかばかりしとったよ」「砂で何かなったんや」「そうね、砂あらしにあったのね」「それからどうなったかしら」「アラン、そりみたいの作って助かったんや」「じゃ3人は仲よくなったのかしら?」「ちがうよ、またけんかしとったよ」「今日はどうかしら」「またけんかするよ」「仲よくなるよ」「どうかしらね、見てみましょうね」

・テレビを視聴する。

場 面	幼 児 の 発 言	教 師 の 助 言
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミーンとアランが言い争っている。</li> <li>・ケーンとアランが相撲をしアランが勝つミーンとアランが相撲をしアランがわざと負ける。</li> <li>・食事中にケーンとアランが言い争いをしアランが席を立ちどこかへ行く。</li> <li>・ケーンとミーンがポコに乗って散歩に行く様子をアランが木の上から見ている。</li> <li>・ポコが鳴いている。悪者が出てくる。</li> <li>・悪者が仮病を使いポコを横取りしようとしている。</li> <li>・アランが入口の扉をしめる</li> <li>・アランの助けでポコをとり戻す。</li> <li>・3人がポコの背中に乗りながらけんかしている。</li> </ul>	<p>一緒に歌を歌う。</p> <p>あっ、またけんかしとる。</p> <p>ケーン勝つよ、アランや、ああああ、ミーン勝った。</p> <p>ほうやミーン強いよ。</p> <p>またや</p> <p>どこ行くのやろ</p> <p>あんなところに登って!</p> <p>ポコ、きっと休みたいがや知っとるよ、悪者や、ポーンポーンと御飯投げとったんや</p> <p>うそや</p> <p>あっ、アランや、いつのまに來たんやろ</p>	<p>共に歌う。</p> <p>どっちが勝つかしら</p> <p>ミーンて本当に強いのかしら</p> <p>ほんとうね。</p> <p>すごいね。</p> <p>みんなあの人知っとる?</p> <p>本当かな?</p> <p>どうして扉閉めたのかしら</p> <p>よかったね。</p>

## ◦ 視聴後の話し合い

「今日のケーンどうだった?」「おもしろかった」「けんかばかりしとったよ」「ケーン達仲よしじゃないの?」「少し仲よしや」「仲よしじゃないよ」「アランてどんな子だと思う?」「いじわるや」「でも本当はいい子や(半数以上の子)」「先生この次も、風の子ケーンみたい」「じゃ今度もまたみましょうね」

この風の子ケーンは、美しい山や湖、草原に囲まれた自然の中で、ケーン達の一家が動物達を仲間にして暮してゆく物語の人形劇であるが、上記のように、運動会という单元の中で、みんなが約束を守り、仲よくするというねらい達成のため活用している。即ち、テレビ風の子ケーンを継続視聴しながら、生活指導の基本を楽しい物語の中から、自然に幼児に理解させていくわけで、17回の視聴では、新しく登場したアランに親しみをもち、そのアランとケーン・ミーンの交わりを通して誰とでも仲よくしなければということを感じさせようとしているのである。

## (2) VTR 利用

指導者 松任市立西幼稚園新保郁教諭

対象 4才児期日(10月19日～11月2日)

題材 仲よしゾウさん(单元かわいい動物)

ねらい グループで製作したり、身体表現やゲームをして楽しく遊ぶ

場 面	幼 児 の 反 応	教 師 の 助 言
王様(ノッポさんが大きな袋の洋服を着る。)	あれなんや、面白い格好や、王様やて、変な王様、おなか出てきたね。 でぶっちょ王様やあれっ、おなかの袋にケーキやおにぎり入れとるがや	
でっかくなろう(ノッポさんが肩車をして星をとる。)	あれっのっぽさん大きくなった。どうして大きくなったんやろ、あれっ2人でしとるがや肩車してもらっとるがや。あ、ほんとや、やっぱしそうやろ。	どうして大きくなったのかね。
せいぞうき(2人組のゾウになってバナナを食べたり、野球・ボクシングをする。)	ゾウになるんやてなれるわけないねせいぞうきて書いてある。あっ鼻出てきた。わあ面白い袋の中に2人入っとるがや、そうやそうや、	せいぞうきて書いてあるね、このきかいでゾウを作るんだって。

ゴリラ（袋をかぶってなる）	あれれ鼻で野球やボクシングしとる面白い。 今度何やろ、あれ洋服着て手にも足にも袋つけとる、あっゴリラや、ほらゴリラやがいね	
ゴリラとイモ虫・かいじゅうの戦い	わあ凄い！がんばれっ、やっつけ！ああ終わった。面白かった。	本当に面白かったね。

視聴後、用意してあった紙袋をみつけて、T男が「先生あの袋でぼくも作りたい」と言い、「ゾウを作ろう」とK男が言う。殆どの幼児が作りたいとの意欲を示した。そこで「のっぽさんのゾウさんどうしていた？」と尋ねるとY男が「二人でしとった、好きなお友達とするがにしよう」ということで男児と女児の仲よしの友達さがしで二人組になった。それから製作に入る。始めに紙袋を与える。H子が「先生この袋、模様書いてあるからだめや」と言う。するとY子が「袋を裏がえしにしたらよい」と言う。それぞれ自分なりの考えを話し合っ楽しく作っていた。袋をかぶったK男が「目のところあけんと見えんわ」と気づき、教師が手伝って目の位置を切りとる。耳を作るところでは、特長を幼児にとらえさせたいというねらいで、ゾウの出てくる場面をもう一度VTRで見せ製作させた。

翌日登園してきた幼児達が、ゾウの面をつけて遊ぶ。足を作りたいという幼児の声があり、製作に入る。「先生、面のときみたいに袋裏がえしにしていたらいい」とY男が言う。みんなそれぞれに、袋を裏がえしにしてはき、歩き始めた。袋がぬけて、歩くのに不便ではないかとの不安があったようだが、幼児達は、足をずらして、抜けないように歩いていた。その動作がいかにゾウらしくかわいかった。面と足をそれぞれつけて、ゾウさんの歌を歌いながら体表現する幼児や、二人組の仲よしゾウになる幼児など、表現遊びに発展して全員でゾウになり、楽しく遊んでいた。

以上の活動は、TV、“袋をかぶろう”のVTRを利用したため、生放送とは異なり、環境設定、製作準備が意図的にでき、スムーズな幼児の創造にそっての活動や、グループ遊びへと発展することが可能となり、望ましい保育だったと言える。

#### 4. 映写機の活用について

津幡町立住の江幼稚園では、子どもの安全能力を育てるために、を研究主題として実践を続け、そこでの指導の中に、映写機を使用し、効果的であったことについて述べてみよう。

安全教育年間計画表（5才児）

月	ねらい	幼児の経験や活動	指 導 内 容	配 慮 事 項
4 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園の遊具の使い方わからせ、正しく使わせる</li> <li>・交通のきまりを知って守らせる</li> </ul>	登降園時には交通のきまりを守る。	1.決められた通りの道順で右側通行で歩く。 2.歩きながらふざけたり、飛び出したりしない。 3.黄色の旗や信号の指示に従う。 4.幼稚園の帰りに寄り道しない。 5.バス通園の子供は、車内で静かにし、窓の外へ手や顔を出さない。 6.交通の標識、横断歩道などの約束をしっかり守る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦右側通行を具体的に意識づけさせるために、ワッペンをつけ、4、5月いっぱい、家庭において登降園の責任をもってもらおう。</li> <li>◦定刻9時30分までに遅刻又は欠席の場合は、必ず、電話、その他の方法で担任まで連絡する。</li> <li>◦通園道の危険場所を点検しておく。</li> </ul>

上記の指導内容1・2・3の扱いのところである。訪問したのは4月の中旬頃であった。主任教諭は、子供達が登園し、降園する道に立って、歩いてくる、戻っていく姿を8mmフィルムにおさめ、それを幼稚園でみせたわけである。子供達は、先ず映写機を操作する先生に興味と驚きを感じていた。

「ぼくらの先生はあんな機械動かすことができるんや」「あれ！ わたしのお母さんや」「K先生や！」「A男ちゃんとB男ちゃんが歩いていく」「あっ、わたしや」キャアキャアと嬉しそうに歓声が上ってきた。教師は、ゆっくり機械を動かしている。この場面を見せたいのだという場面にきたら、ストップして子供に問題をなげかけた。「みんなね、幼稚園へ来るときの歩き方だけど、上手に歩いているかみてほしいの」と、それからフィルムが動きだした。子供達は一瞬静かになった。左側を歩いている子、油断しながら歩いている子、ふざけながらよっぱらいのように歩いている子。友達のものみた、自分の後姿も見た、途中車が来て、S男ちゃんが危ないめにあっている様子も見た。機械が止められた、自分は先生の言われることを正しく守って歩いているのだろうか？、子供達は自分自身を映像で見るのは始めてである。嬉しいような恥ずかしいような驚きのような不思議のような感情を一ぱい持ちながら見入っている。よしこれから右側を行儀よく歩くよ、と心に決めた子がいるに違いない。「さあ、それでは今から広い遊戯室で、よい歩き方を練習してみようか」ということで、横断歩道や踏切りが作られた道で歩く練習が続けられ、楽しい中に子供の理解や経験が深まっていったようであった。以上、これは8mmフィルムを交通安全指導の導入段階にストップモーションを加えるなどしてうまく活用した一例である。



## V. お わ り に

3才2ヵ月の女兒を保育園に入園させるとき、両親の勤務と家庭の都合で原則の時刻より30分早く預かってほしいと願い出たところ入園式のときの態度が特別変っていたから預かれなと断られた。(再度の希望で許されたが)しかし早く預かってもらえる子は数人いる。その数人の幼児達は普通の子だそう、特別の子と普通の子とをどのような物差しで判別したのだろう。その女兒は極めて健康で、運動神経が発達し、常にじっとしていない活発な子である。誕生してから小さな狭い家庭で日中は祖母と2人きりの生活を3年間過ごし生れて始めて、大きな広い保育園で入園式を迎えたのである。近所の仲よしの友達、知らない大勢の友達、大きな建物、面白そうな遊具、保母さん達、見るもの、聞くこと珍しいことばかりで嬉しくてどうしようもない喜びが、席を立ち、とびまわる行動として表出したようだ。しかし保母はこの行動をみて、特別行儀の悪い子と見たわけである。このように教師の意に添わない言動があるからすなおな子でないとか、問題児だとか、特別な子だとかいう見方をし、教師の思いのままに動く子、即ち扱いやすい幼児を普通の子、よい子としがちであるが、このことは非常に危険な見方である。幼児ひとりひとは、ひとりひとりが、自分の世界をもっていることに気づかねばならない。そして、幼児の中にある本当のものを見つけ出すことである。既成の保育の流れに幼児をひっぱりこみ型にはめこむことのないようにしたいものである。即ち、保育に幼児を合わせ、うんぬんするのでなく幼児に保育を合わせるといった角度から保育を見なおしてみると、そこに幼児の自主性や、個性や、創造性を育てる保育が成立すると言えよう。

更に、望ましい幼児の指導には、教師の人間性が大いに左右することを忘れてはならない。研究授業(保育)や補欠等でその級に入ると、担任の教師の性格がそのまま級の性格のように受け取れることがよくある。常に他を批判する教師の級の児童達は、何事にも批判がましく、明朗活発な教師の級は、児童達も明るく感じる。板書のきれいな教師の級の児童達は、文字を丁寧に書く等、毎日毎日長時間の接触が、いつの間にかこのような結果を生んでしまう。それは幼稚園にも同じことが言えるわけで、家庭での、幼稚園での様々な人間関係から感情の整理がつかないまま、保育に望まねばならないことも起きるだろう、しかし、教師が不安な精神状態で保育にのぞめば、幼児も落ち着かなくなる。その反面教師が幼児ひとりひとりに心からの愛情と熱意をもって保育にあたるならば幼児達も、輝きの眼でついていく。教育の仕事には限界がなく、それだけにたゆまぬ努力が必要であり、また張り合いもある。確たる保育理念、すぐれた保育技術と共に人間としての謙虚に反省する日日でありたいものである。

### 参考文献

- 発見学習の研究 水越敏行著(明治図書)
- 幼児心理にあわせた導き方事典 品川不二郎・品川孝子・昌子武司・森上史朗・石井哲夫著(あすなろ書房)
- OHPの活用とTP製作の実際 末武国広・岸本唯博編著(学習研究社)